

おひさま



沼津市立原東小学校
 通級指導教室 「おひさま」
 TEL 967-1213
 FAX 967-1214
 平成31年 2月 6日
 平成30年度 No.12

立春



毎日寒い日が続いていますが、節分が終わり、暦の上では春です。新年を迎えた頃は、寒さで縮こまっていた草木も、土の中でしっかりと根を張り、暖かい春の訪れの準備をしています。

先日、「おひさま」での指導中、去年何度挑戦しても1回も跳べなかった縄跳びの二重回しに、今年も挑戦を始めたら、急に跳べるようになったという、うれしい瞬間に立ち会うことができました。「きっとうまくいく」と自分を信じて、続けてきた努力が報われた体験は、これからの人生の中で、困難なことに立ち向かう強い心を育てていくのではないのでしょうか。

2月の予定

- 11日(月) 建国記念の日
- 19日(火) 研修会のため、午後お休みです。
- 22日(金) 第4回合同懇談会「ぼれぼれ」
大岡小にて 10:30~11:30



第4回 合同懇談会「ぼれぼれ」
 ☆22日(金) 10:30~11:30
 ☆大岡小学校 おひさま教室にて
 ☆テーマ「今年度を振り返り、来年度に向けて」今年度最後の「ぼれぼれ」です。うまくいったこと、現在継続中のこと、来年度への不安、引き継ぎについてなど、一緒に考えて行きましょう。

お忙しい時期とは思いますが、みなさんの参加をお待ちしております。

「子どもの難問 哲学者の先生、教えてください!」

野矢 茂樹 編著 (中央公論新社)

子どもたちから、「なぜ、勉強しなくてはいけないの?」そんな質問をされて、困ったことはありませんか?この本には、そのような、子どもたちがよく質問する内容に、哲学者の先生たちが、答えてくれている本です。

「好きになるってどんなこと?」という質問に対する答えの中に、こんな文章がありました。「好きになった人を嫌いになってみたり、また好きになったりしながら、僕は結局、自分自身を喜んで受け入れるような生きる形を、この世界の中に見つけていくんだと思う。自分を愛せなくては、人を愛することもできないが、人を愛さなければ、自分を愛することもできないのが難しいところ。」このような、子どもたちからの純粋な質問に対する哲学者の先生たちの答えを読んでいると、もう子どもではなくてしまった大人も、たまには、こういうことを立ち止まってゆっくり考えるのもいいものだと思わせてくれる本です。



静岡県地域療育講演会「発達障害のある人の感覚と運動の問題と対応について」より

長崎大学医歯薬学総合研究科教授・作業療法士 岩永竜一郎 先生

1月25日、静岡市にあるグランシップで、第18回静岡県地域療育講演会が開かれ、長崎大学の岩永先生による講演がありました。午前中は、発達障害のある人の感覚や運動の問題の特性について、午後は、発達障害のある人の感覚や運動の問題への対応と支援についてのお話を聞くことができました。

教室がうるさくて苦しい、給食が食べられない、触られるのがいや、文字をきれいに書けない、体育で自分だけできない、工作がぐちゃぐちゃになるなどで、困っているお子さんを見かけることがあります。これは、本人のわがままなどではなく、本人にとっての感覚や動きに関する深刻な困りごとであり、学校や家庭で支援をしていく必要があります。

運動面の大変さを抱えている人に、発達性協調運動症(DCD)が見られることがあります。麻痺がないのに不器用だったり、姿勢が悪かったり、文字がうまく書けなかったり、体育や工作が苦手だったり、約6%の人にDCDがあるとされています。また、発達障害の注意欠陥多動症(ADHD)のお子さんの55.2%、自閉スペクトラム症(ASD)のお子さんの79%に明らかな運動面の問題が見られるとされています。発達障害のお子さんを対象に調査した結果、次のような身体の動かしにくさが見られたそうです。

- ・体に力が入って疲れるので、字を書くのは苦手で、漢字はできれば書きたくない。
- ・眼球の動きが不器用で、数行飛ばし読みをしてしまう。
- ・まっすぐ座れず、すぐ椅子にもたれかかってしまう。
- ・字を枠におさめることに非常に苦労する。
- ・目をつぶっての片足立ちができない。
- ・身体の動きがとてもぎこちない。
- ・朝はバランス感覚がうまく保てない。
- ・左右の手足をバランス良く動かせない。



感覚面の大変さについては、感覚刺激に対する反応異常が、ASDのお子さんの80%以上に見られるとされています。ASDは、コミュニケーションの障害といわれているので、私たちは、そこに焦点を当てて支援を考えることが多いのですが、岩永先生は、感覚の問題への支援の方が先だとおっしゃっていました。例えば、聴覚的な過反応として「耳ふさぎをする、赤ちゃんの泣き声を嫌う、非常ベルを聞いて不登校になった」など、触覚では「他の人の接触を嫌う、歯磨きや耳掃除を極端に嫌がる、特定の感触の洋服しか着ない」など、視覚では「蛍光灯を嫌うなど、味覚臭覚では、特定の味や臭いを嫌う」などがあります。情報の取捨選択が難しく、自分が必要としない情報が24時間入ってきてしまうため、毎日の生活がきつくて疲れやすいと、ほとんどの当事者の方が、自叙伝などでその大変さを語っています。

では、運動や感覚面での大変さのある方が身近にいたら、どのように対応していくと良いのでしょうか。運動の問題への対応としては、不器用は発達の特性であり、本人の努力不足ではないことを理解して、支援してほしいということです。初めて取り組むときが一番難しく、劣等感を持ちやすいので、予めやり方やコツを分かりやすく説明することが有効です。身体の動かし方を、「右右、左左。」などと言語化したり、手順を絵や写真で示すと伝わりやすかったりします。次に、感覚の問題への対応としては、まわりに特性を理解してもらい、合理的配慮として、環境調整をすることが必要です。個室を用意してもらう、パーティションを活用する、運動会のピストルをやめるなど、すぐに取り組むには難しいこともあるので、配慮する側とされる側の合意形成が大切になります。感覚過敏は、情緒の安定を図ることで、軽減するといわれています。互いが安心できる関係を築くことも有効な支援となります。

